

【ぬら孫】 双子の兄妹は
我が道を行く【奴良リ
クオ】【氷麗】

月華綾響

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

知らぬ間に転生トリップしてしまった少女。

双子の兄は前世で兄のように慕っていた先輩とよく似ていた。

リクオにガチ恋だった少女、結ばれる訳ないと思っていたのに…。

リクオの婚約者、雨宮水月。

「私は、何があろうと守ってみせる」

後輩を亡くし、気付いたら転生トリップしてしまった少年。

双子の妹は前世で妹みたいに可愛がっていた後輩とよく似ていた。

水麗が好きだった少年、報われなれな思っていたのだが…。

水麗の婚約者、雨宮大翔。

「俺はもう、後悔したくないんだ」

双子は今日も生きていく。

目次

プロフィール	1
婚約者は前世で恋した人	8
双子は奴良家へ	18
”あの人”と呼ばれし者、何度目かの再会	24
双子の苦悩	30
覚醒	37

プロフィール

雨宮 水月

(アマミヤ ミズキ)

性別：女

種族：結界師と妖狐の半妖

身長：168cm

体重：55kg

性格：クール。冷静。仲間思い。割とブラコン。ツツコミ系。好き嫌いがはっきりしてる。

容姿：肩くらいの黒髪。瞳は黒のツリ目気味。普段着は薄紫の無地シャツに青のジーンズ、腰には薄手のパーカーを巻いてる。胸はEカップで、全体的にスタイルが良い。妖怪時は、銀髪の腰辺りまである髪。瞳は金色のタレ目。下がキュロットの死覇装(少しはだけてる)、紺色のタイツとブーツ。鉄扇はリクオからのプレゼント。胸はE

カップで、全体的にスタイルが良い。

武器：刀・鉄扇・護身用ナイフ

大翔の双子の妹でリクオの正式な婚約者

奴良組の三代目補佐

両親の死後にぬらりひよんから伝達を貰い、大翔と共に浮世絵町に引越して来た転校生。幼い頃に婚約していたので奴良家に身を置いている。代わりに家事を若菜や氷麗と共に行っている。尚、花嫁修行になっている。リクオの弁当は水月が作ってる

総大将と二代目のお気に入り、若菜から娘のように可愛がられている。因みに、首無や鴉天狗等からは妹のように可愛がられている。氷麗や青田坊に黒田坊等や小妖怪達からは姉のように慕われている

性格が性格な為に好かれ易い（特に女に）傾向がある。妖怪でありながら、花開院ゆらや竜二といった者達からの信頼が凄い。曰く「水月は特別」だそうで…

身内に仇なす者は許さない主義

能力

・結界術

・BLEACHの鬼道系等は全て使える

・祖母の治癒の力が使えるが緊急時のみ

戦闘能力

鯉伴と同等くらい。遠野に行つてからはぬらりひよん並

式神

四神を中心とした構成

水龍・炎龍・風龍・闇龍・光龍・雷獣

かつて女神に仕えていた神龍の力を借りる事もある

幼き頃の約束と契りで、リクオの婚約者である事は明確になつている。リクオの側を離れる事はなく、常に隣に居る事が当たり前。リクオを心から愛してる。「私の大切な人達を傷付けたら、許さないわよ」

雨宮 大翔

(アマミヤ マサト)

性別：男

種族：結界師と妖狐の半妖

身長：175cm

体重：60 kg

性格：クール。冷静。仲間思い。シスコン。好き嫌いがはっきりしてる

容姿：黒の短髪。瞳は黒のツリ目。普段着は紺色の無地シャツに青のジーンズ。それなりの筋肉が付いている

妖怪時は、銀の短髪。瞳は金色のツリ目。死覇装を着ている。それなりの筋肉が付いている

武器：刀・護身用ナイフ

水月の双子の兄で氷麗の正式な婚約者

雨宮組の現当主

両親の死後にぬらりひよんから伝達を貰い、水月と共に浮世絵町に引越して来た転校生。幼い頃に婚約していたので奴良家に身を置いている。大翔の弁当は氷麗が作ってる

総大将と二代目のお気に入りで、若菜から息子のように可愛がられている。因みに、首無や鴉天狗等からは弟のように可愛がられている。青田坊に黒田坊等や小妖怪達からは兄のように慕われている

性格が性格な為に好かれ易い傾向がある。花開院竜二みたいな奴は嫌い

身内に仇なす者は許さない主義

能力

・ 結界術

・ BLEACHの鬼道系等は全て使える

・ 祖父の治癒の力が使えるが緊急時のみ（しかし、水月よりは弱い）

戦闘能力

鯉伴と同等くらい。遠野に行つてからはぬらりひよん並

式神

四神を中心とした構成

水龍・炎龍・風龍・闇龍・光龍・雷獣

幼き頃の約束と契りで、水麗の婚約者である事は明確になっている。水麗の側を離れる事はなく、常に隣に居る事が当たり前。水麗を心から愛してる

「俺の妹やアイツ等に手を出すなよ」

雨宮 優菜

（アマミヤ ユウナ）

九尾の妖怪。鯉伴と恋仲だったが、羽衣狐の呪いによつて泣く泣く別れる事になった。翔斗と結婚した今も、鯉伴を想い続けている。自分の代わりに若菜を嫁がせるよう

に提案した張本人。曰く「全く知らない女よりは、親友の若菜が嫁いでくれた方が安心出来るのよ」だそうで…。

双子が小学生に上がる頃には羽衣狐に肝を取られて死に絶えたが、その前に力は全て水月に受け継がせ済みだから大した出汁にもならなかつたらしい

雨宮組二代目

雨宮 翔斗

(アマミヤ ショウト)

結界師。鯉伴の親友で、良き理解者だった。羽衣狐の呪いの内容にいち早く気付いた張本人。若菜とは親戚。鯉伴と話し合い、呪いの件もあるから頼むと言われて結婚した。優菜をちゃんと愛してる

羽衣狐に肝を取られて死に絶えたが、その前に力は全て大翔に受け継がせ済みだから大した出汁にもならなかつたらしい

雨宮組二代目補佐

雨宮 月

(アマミヤ ルナ)

ぬらりひよんと夫婦だったが羽衣狐を討ち取る際に庇って肝を抜かれた。自分も
う保たない事を知り、娘に力を受け継がせて置いた事に安堵した。親友の瑛姫にぬらり
ひよんをお願いし、死に絶えた。

雨宮組初代総大将

婚約者は前世で恋した人

かつて人は妖怪を畏れた

その妖怪の先頭に立ち

百鬼夜行を率いる”男”

人々はその者を妖怪の総大将

あるいはこう呼んだ

魑魅魍魎の主、ぬらりひよんと

水月 s i e d

ふあゝ…あ。もう朝か。

ヒョコッ

「水月、朝飯だぞー」

そう言つて障子を開いて顔を覗かせるのは私の双子の片割れ、雨宮大翔。

「今行くよー!」

私がかここに転生してから数年。まさかのぬら孫の世界とはね。

男のような容姿を持つお婆様の恩人に連れられて行った神社で少女と男性、遠くの方に少年が居たのを見た。恩人は急いだ様子でその父親を”助けた”。少年は気絶。そ

の少女はお爺さんと共に何処かに消えてしまったけれど…。

「おはよ〜」

「おはよう、水月」

「おはよう、水月ちゃん♪」

両親に挨拶をし、先に座って居る大翔の隣の椅子に着く。「いただきます」と口を揃えて言い、食べ進める。

「2人共、旅行の準備は終わってる？」

「うん、大丈夫だよ。お母様」

「俺も平気だ、お袋」

「そう♪」

「遂にこの日が来たか…」

「ふふふ、そうねえ」

我が家は割と古風なお屋敷。奴良組の傘下の雨宮組。其れこそ、あの魑魅魍魎の主と呼べれし”ぬらりひよん”とお母様の母、つまりは私の祖母にあたる”お婆様”は戦友。しかも、奥方様の護衛であり親友だったんだとか。

お母様はそのぬらりひよんの息子にあたる二代目の奴良鯉伴の戦友で氷麗の母、雪麗の親友。しかも昔は想いあっていたが、恐らく羽衣狐の呪いのせいで妖同士の子は為せ

ない事を知る事となった。だから、今はこんな状況なんだ。

でも、今でも二代目と想いあつてるのがお母様だ。お父様はそれでもお母様を愛しているらしい。…大翔と私はそれを知って辛くなった。お母様の想いの強さを、目の当たりにしたからでもある。

「(「)馳走様」」

「お粗末様です。それじゃ、行きましょー!」

上機嫌のお母様に連れられて、荷物を乗せる。お父様が運転手として車を走らせる。

「大翔、水月」

「?」

「2人にとつて、とても大切な存在になる子がもう直ぐできると思うわ。でもね、決してその子の全てを否定してはいけないの。分かったかしら?」

「…はい」

「それなら良かったわ」

「さあ、着いたよ」

私達と同じ位大きい和風な屋敷。アニメで見たまんまだと改めて思う。

今の私達は妖の姿で屋敷に出向いている。私と大翔は半妖だけど、覚醒が早かったから力の暴走はしてない。

「あ！優菜！お久し振り〜！」

「若菜じゃない！お久し振り〜！」

「んもう、元気だった？」

「元気に決まつてるじゃないの〜」

まるでjkの会話のように華を咲かせるお母様達。

「あら？この子達が優菜の子供達？」

「ええ、そうよ！」

「大翔と申します」

「双子の妹、水月に御座います」

「あらあら〜可愛らしい子供達じゃないの、流石は優菜ね！」

「ふふん。つて、若菜の子は何処に？」

「あの子なら…」

パタパタ…

「おかーさん！」

「お待ち下さいませ！若あ!!」

誰かが私達の方に走って来ている。私と大翔はそつちを見る。

茶髪の男の子と、その子を慌てた様子で追い掛けている白の着物を着ている紺色が

かった髪の毛の女の子…雪女かしら？

「あらリクオに氷麗ちゃん。丁度良いタイミング！優菜、この子は息子のリクオ。こっちは雪女の氷麗ちゃん」

「あらあら…本当、鯉伴によく似てる」

「お姉さん、お父さんを知ってるの？」

「ええ、よく知ってるわ…」

…これ以上は良くないわね。

「お母様、そろそろ…」

「そうね。…若菜、ぬらりひよん様は居るかしら？」

「優菜…。ええ、今案内するわね。氷麗ちゃんはリクオをお願いね？」

「は、はい！」

私達が歩き始めた時、ギョツと誰かに死覇装の袖を掴まれて振り返る。其処には後に三代目となる彼、リクオ様が私の袖を掴んでいた。

ふと、隣を見る。…如何やら、大翔も氷麗に袖を掴まれたらしい。

「大翔？水月？」

「お母様、先にお行き下さい」

「我等は後から向かいます」

「…分かったわ」

お母様達を先に行かせて、私達は2人に体を向ける。

「…私達に何か用でしょうか」

「あの…ボク、リクオ」

「氷麗と、申します」

「2人の名前は？」

「大翔と申します」

「双子の妹、水月に御座います」

「水月…」

「大翔、様」

頬を赤らめ、私達の名前を呟く2人。ふむ、可愛らしい。

確か、話ではリクオ様の事は聞いていたし…接触しても大丈夫でしょう。

「…リクオ様」

「あ、なあに？」

「リクオ様は三代目になられるのですか？」

「う、うん！なるよ！」

「そうですか…」

私達は雨宮組。奴良組の者じゃないから、あまり長く話す訳にはいかないわね。…リクオ様は気付いてないけれど、周りの妖怪は警戒しているのだから。

「リクオ様、またお会いしましょう？では、私はこれで…」

…いや、なんで離してくれないのですか。

「水月…ボクは君がすく」

人差し指を彼の唇に触れさせて言葉を止める。それ以上、聞く訳にはいかない。

どうして？

と、悲しげに見つめてくるリクオ様。ああ、そんな顔をなさらないで下さいませ。私だって、貴方様のものになりたいわ。

でも、まだその時ではないです。

「私達はまだ出会ったばかりですわ。まだ、口に出してはなりません。…貴方様が、覚醒なされば…私は貴方様のお側にいる事が出来ますわ。それまでは、どうか…胸に秘めていて下さいませ」

頬を赤らめて淡く微笑み、同じ身長の彼の耳元に口を寄せる。

「その時は、私を…貴方様のものにして下さいませ」

驚く彼に微笑み、大翔と共にお母様の下へ歩き出す。

「気に入ったのか？次期三代目若頭を」

「あら、それはこちらの台詞よ？」

あの娘と約束してたみたいね」

「まあ、お袋が許してくれるかによるけどな」

「ふふ、それもそうね」

その後の御披露目も終わり、私達はリクオ様と水麗の4人で同室に居た。

先程の会議にて

私はリクオ様の婚約者、大翔は水麗の婚約者となる事が決まった。

お母様に言われて人間の姿に戻ると2人は驚いていた。

今は其々で話してる最中。敬語は外してくれと言われたが、妖の時は無理だと伝えてある。

「水月の好きなものってなに？」

「桜と月、かな？」

「あ、なんか分かるかも？夜に見上げる桜と月は綺麗だよね！」

「うん♪」

夢にも思わなかったわ。まさか、ガチ恋してたリクオ様の婚約者になれるなんて…。本当に嬉しいっ！

にしても、さつきからなんで障子から隠れて見てるのかしら？おじ様達。まあ良いか。…ワンピースだけど、下はスパッツ履いてるから大丈夫でしょう。

「…リクオ君、抱き付いても…いい、かな？」

「っ…う、うん。良いよ」

リクオ様の胸に擦り寄る。リクオ様は頬を赤くしながらも私を抱きしめてくれる。それが嬉しくて首元に顔を寄せる。

「(か、かわ…ん”ん”…////)」

「リクオ君？大丈夫？」

「あ、な、なんでもないよ！」

「？それならいいけど」

これからは、貴方様のお側に居りますからね。リクオ様

双子は奴良家へ

N O s i e d

婚約者となったあの日、翌日には遠野の方へと挨拶に行つて泊まり…その翌日に家に帰つて来た。

しかし、その後に両親は羽衣狐によって殺された。

双子が家に帰つて来た時には手遅れだったのだ。小学生になった頃、一通の手紙が届いた。

ぬらりひよんから、”我が家へ移り住め。使いの者は出す”という指示。双子はそれに従う事にした。

夜……

「お迎えに上がりました。大翔様、水月様」

「三羽鴉様」

「ふふ、水月様…いえ、姫様。私の事はささ美とお呼び下さいませ。敬語も要りません。総大将と、あのお方」から姫様の側近に任命されましたので」

「ささ美…分かったわ。宜しくね」

「はい」

「大翔様、我々の事は黒羽丸とトサカ丸とお呼びください」

「側近に任命されましたので、宜しくお願ひします」

「ああ、宜しく頼む。黒羽丸、トサカ丸」

「では、参りましょう」

ささ美は水月を、黒羽丸は大翔を抱える。トサカ丸は緊急の戦闘係であった。

家にある家具等は既に奴良家に配送済みである為、荷物は少なかった。

「ささ美」

「はい、姫様」

「…頼りにしてるからね」

「！…お任せを、姫様」

ささ美の返答に満足した水月。

そうこうしてる内に奴良家に着いた。

「大翔君！水月ちゃん！」

双子は降ろしてもらい、若菜に抱き締められる。

「良かった、良かったわ……2人だけでも、無事で」

親友の優菜を亡くした悲しみと、双子が無事である事に対する喜びとで涙を流す若菜。

「若菜、様」

「っ、我慢しなくていいのよ。泣いたって、いいの」

「っ、」ポロポロ

静かに泣く双子を強く、優しく抱き締める若菜は心に誓う。
必ず、この子達の笑顔を守り続ける。と。

そのまま疲れて眠った双子。

翌日に目を覚ますと、隣には其々の婚約者が眠っていた。

「っ、ちよ……り、リクオ君？リクオ君ってば！」

「ん、んん……？」

「あ！おはよ水月！」

「え、お…おは、よ?」

「氷麗、起きてくれ氷麗」

「んん…?」

あ、大翔様!おはようございます!」

「え、あ…おはよ」

双子は顔を見合わせて首を傾げた。

その時、障子が開く。

「あらあら、居ないと思っただらここに居たのね。リクオ、氷麗ちゃん」

「あ、若菜様!」

「ほらほら、今日は学校でしょう?早く準備して来なさいな。氷麗ちゃん、お願いね」

「はい!」

「はい!」

2人が退出した後、若菜は双子に向き直る。

「よく、眠れたかしら?」

「…一応は」

「そう…」

再び来訪者が現れた。

奴良鯉伴、奴良組二代目だった。

「どつかで見た事があると思えば、お前さん……あの人」と一緒に居た娘だろ?」

「“あの人”……?」

「名前で言わないと分からないか……」

「ふふ、綾響様の事よ。黒崎綾響様。水月ちゃんなら、会った事があるんじゃないかしら? 優菜や月様の恩人」

「!あの人、の事なのですか!?!」

「大翔君はどう?」

「俺は、名前だけならよく聞かされてたので分かります」

信じられないという表情の水月と首を傾げている大翔。2人はクスクスと笑っている。

「今呼んだら来てくれるかもな」

「なんだ親父、呼べんのか?あの人を」

「お義父さん、出来るんですか?」

「ええ機会やからの、呼び出したるわい」

「「え?」」

これは本人から教えられた唯一の術式。扱えるかどうかはソイツ次第。さて、現れるか否か。

”あの人”と呼ばれし者、何度目かの再会

何かを唱えたかと思うと、桜吹雪が巻き起こる。

「うわっ!？」

「きゃっ」

急にその桜が散り、風が止むと誰かが立っていた。

「あ、あなたは…」

「師匠、お久し振りですな」

師匠と呼ばれた者はゆるりと瞼を上げる。

「…ふむ、随分と老いたな。ぬらりひよん」

「ほつとけ!!」

「ふっ…鯉伴も久しいな」

「お久し振りです、綾響殿」

「綾響様！」と抱き付く若菜を優しく抱きとめる。

「若菜も、元気だったか？」

「はい、元気でしたわ。綾響様」

双子はポカーンとしている。

「水月も久し振りだな、元気そうで何よりだ」

「は、はい！」

「君が大翔だな。優菜達から話は聞いているよ」

「は、はい」

「…して、俺を呼んだのは何故だ？ぬらりひよん」

「いえ、双子と会っていただきたく思ったからですわい」

「…ふーん、お前の事だから”アイツ”も来てくれたらとか思ってたんじゃないの？」

ギクツと目を逸らすぬらりひよんに冷たい視線を送る綾響。

「綾響様！お義父さんよりも私や双子ちゃん達と一緒にゆつくりしませんか？」

「それもそうだな。若菜、ちよつとごめんな」

「え？ひやつ…」

「こつちの方がいいだろう？」

「んもう、綾響様つたら／＼」

クスクスと笑い、若菜を姫抱きしたまま歩き始める綾響の後ろをついて行く双子。鯉
伴は溜息を吐き、ぬらりひよんをジト目で見る。

「親父」

「な、なんじゃ」

「…よくお袋に捨てられなかったよな、ホント」

「うっ、瑛姫がワシを捨てる訳ないじゃろ!？」

「いや、綾響殿が男だったらアウトじゃ…」

「…言うな、鯉伴」

落ち込むぬらりひよんを慰める鯉伴であった。

暫くして——…

部屋で楽しく話している4人の下に首無が様子を見に来ていた。

「おや、綾響様。お久し振りです」

「やあ、首無。元氣そうで何よりだ」

「それにしても、何故此方に？」

「ぬらりひよんに呼ばれたから来た」

「総大将…（遠い目）」

クスクスと笑い、首無に「放って置いて構わん」と伝える。

「リクオ様は学校に行かれましたが、帰りを待ちますか？お会いされてないのでしよう

「？」

暫し考え込み、首を横に振る。

「いや、今は会うべきではない。リクオが覚醒したら連絡してくれるか？」

「分かりました」

「綾響様、もう行かれるのですか？」

”まだ居てほしい”と目で訴えかける若菜の頭を撫でて立ち上がる。

「ごめんな、若菜

…水月、大翔。お前達の後悔しない道を進むんだぞ」

「はい！」

双子の返事に満足したように頷き、空間を開く。

「じゃあな」

空間の中に入ると消え去った。

「綾響様は相変わらずのようですね」

「ふふ、それがあの人だもの」

「綾響様、あの頃と変わらない姿だった…」

不思議そうに首を傾げる水月。

「時間の流れが違うから、仕方のない事よ」

ニコニコと楽しそうに言う若菜。

首無は苦笑しつつ思い掛けない言葉を言う。

「綾響様は総大将の師であらせられますが、話によれば当時と全く変わらぬお姿なのだとか…」

「え、そうなのか!？」

驚きの声を上げる大翔に頷く首無。

ぬらりひよんと鯉伴が部屋に入って来た。

「総大将、二代目も来たんですか」

「師匠の話だったらワシ等の方が詳しいじゃろ」

「綾響様はお帰りになられましたよ?」

「知つとるよ。連絡が来たからのう」

「親父がお袋に捨てられなかったのが不思議でならねえ…」

「あら、どうして?」

「綾響殿が居るなら親父と夫婦にならなくても良くないか?」

「あ、確かに…」

うんうんと納得したように頷く。ぬらりひよんは恨めしそうにジト目で鯉伴を見る。

「…鯉伴、お前はどっちに着いてるんじゃ」

「ん？俺は昔から綾響殿だけど？」

落ち込むぬらりひよんに苦笑しつつ、水月はふと思つた事を言う。

「でも、それだと二代目も同じ事が言えるのでは？」

「…何も言えねえ」

ぬらりひよんの隣で同じように落ち込む鯉伴。

双子の苦惱

大翔sied

突然だが、俺の事を詳しく話そうと思う。

何から話せばいいかわからないが、思った事をそのまま伝える事にするよ。

先ずは俺は前世では高校生、生徒会にも所属していた。その一つ下には妹のように可愛がっていた後輩が居る。

俺や他の奴等がする仕事について行く雛の様に後ろについて来ていた。

「先輩先輩！今日は何をやるんです？」

「今日は、コレの打ち込み。何ならやってみる？」

「はい♪」

俺達を真似て作業する姿がまるで、妹の様に思えたのは初めての事だ。でも、決して嫌な訳ではない。

寧ろ、成長していく事に安心感を覚えていた。

側にいるだけで心地よく、今思えば…癒されていたんだと確信を持って言える。

頼る事を知らない、手の掛かる妹。そんな感じだった。

だから、アイツが死ぬなんて…思わなかった。

「え…?」

「辛いのは分かるよ…でも、事実…だから」

横断歩道を歩いていたら時に、信号無視で猛スピードを出していた車に轢かれた。病院に運ばれたが、死亡が確認された、らしい。

ああ、なんでなんだ。アイツにはまだまだ教えてやりたい事も、教えてほしいと言われた事も出ていない。約束を、守れていない。

その後、俺はアイツと同じ様に事故に遭って死んだ。

そして今現在、双子の妹の水月を見て思う事があった。

「アイツと、よく似ている…」

「大翔? どうしたの?」

「いや、何でもない…」

もし、アイツであるなら…。

「大翔ってさ、私が昔よく懐いていた人とよく似てる」

「！おまつ、今なんて…!？」

そうか、やつぱり…お前だったんだな、水月。

「…ふふ、せーんぱい♪今度はちゃんと兄妹ですな♪」

「っ、水月。今度こそ、お前を守ってみせるから」

お前は、涙を流しながらも笑って頷いた。

なあ、水月。もう一度、今ここで誓うよ。

雨宮組を継いで、お前が安心してリクオに嫁げる様に強くなってみせる。
今度こそ、お前の幸せを見届けるよ…。

水月 s i e d

何から、話せばいいかな。∴私は転生者なんだ。

前世は高校生で、生徒会に所属してから初めて尊敬出来る先輩が居た。その人が大翔先輩。兄のような人だ。

「先輩！これってどうすればいいんですか？」

「ああ、それはこれを使えばいいよ」

「はーいー！」

我ながらよく懐いてたと思う。あんなに拒んでたのに、先輩の事はあつさりと認められた。何をするにも雛の様に後ろをついて行っていた。

これからだったのに…。

キキイイイードンツ

横断歩道を歩いていただけなのに、どうして車に轢かれたの…？これが”死ぬ”って事なのね。…痛い、苦しい、辛い…でも、虚しい。

ああ、どうして…。先輩にはまだまだ教えてほしい事が沢山あったのに…約束を、守れてもないわ。

ごめんなさい、大翔先輩…。

そして今現在、双子の兄の大翔を見て思う事があつた。

「アイツと、よく似ている…」

「大翔? どうしたの?」

「いや、何でもない…」

もし、先輩であるなら…。

「大翔つてさ、私が昔よく懐いていた人とよく似てる」

「!おまつ、今なんて!?!」

やつぱり、先輩だったんだね。

「…ふふ、せーんぱい♪今度はちゃんと兄妹ですな♪」

「つ、水月。今度こそ、お前を守ってみせるから」

先輩の言葉に…私は、涙を流しながらも笑って頷いた。

ねえ、先輩。もう一度、今ここで誓うね。

リクオ君に嫁いで、先輩が安心して雨宮組を継げるように頑張る。
今度こそ、先輩の幸せを見届けるね…。

覚醒

大翔 s i e d

俺達が奴良家に来て早数日。

リクオの通う小学校に転校生として入るらしい。

って——…

「急な事ですね、爺様」

「なあに、心配せんでもよい。お前達なら上手くやるじやろ？」

「だとしても、おじ様？突然過ぎますわ」

「すまんの、師匠からの頼まれ事でもあるんじやよ」

首を傾げる俺達に爺様は笑って誤魔化す。

「水月としては嬉しいじやろ？リクオと居れるんじやからな」

「ま、まあ…それは、そうですけど」

頬を赤らめる妹が可愛い。って、そうじゃない。

「面倒くさい…」

「ま、大翔…（苦笑）」

「明日から行くんじゃないぞw」

落ち込む俺を慰める水月。

にしても、外が騒がしい。何かあったのだろうか？

爺様も目を細めて庭を見る。

「行くぞ」

「はい」

爺様の後続く。

俺達が着くと、丁度氷麗が取り乱しつつも、指を差している。その方向にはテレビが

あった。そこには……。

【中継です!!浮世絵町にあるトンネル付近で起きた崩落事故で路線バスが”生き埋め”

に…中には浮世絵小の児童が多数乗っていたと見られ…】

!?

助けに…行かないや…!!

ついてきてくれ!!青田坊!!黒田坊!!皆!!」

「へ…ヘイツ!」

しかし、リクオとついて行こうとする妖怪達を木魚達磨が止める。

「木魚達磨殿…?」

「なりませんぞ。人間を助けに行くなど…

言語道断!!」

「な、何で…?」

「そのような考えで、我々妖怪を従える事が出来るとお思いか!?我々は妖怪の総本山…
奴良組なのだ!!」

人の気まぐれで百鬼を率いられてたまるか!!」

木魚達磨の言葉に同意出来る部分はある。

「リクオ君…」

リクオ、如何するつもりだ。

俺の妹の顔を曇らせるんなぞ許さねーぞ。

「や…やめねえか!!」

リクオの叫び声に言い争いをしていた青田坊と木魚達磨、そして彼等を止めようとしていた奴等も驚いたようにリクオの方を向いた。

「時間がねえんだよ。おめーの分かんねー理屈なんか聞きたくないんだよ!!木魚達磨

!!」

「?」

「なあ…皆…」

「若…?」

「若の姿が…?」

「何これ?こんな若…初めて」

「俺が”人間だから”だめだというのなら…妖怪ならばお前等を率いていいんだな!?!
だったら…」

人間なんてやめてやる!」

妖怪となったリクオの鋭い深紅の瞳を見た木魚達磨は畏怖になったのか、額に汗を浮かべる。

「え…(なんだ!?!これは…この目、さっきまでとは別人)」

そんな木魚達磨を無視して、リクオが水月を見る。

「水月」

「!…:はい、リクオ様」

手招きされた水月は妖怪の姿に変化し、リクオに近づく。リクオは片腕で水月を抱き寄せ、頬に手を添える。

「リクオ様…?」

「オレの隣に居ろ、水月。絶対に離れるな」

「……私はいつでも、貴方様のお側に」

リクオに擦り寄り寄る水月。俺としては、一先ず安心かと思っている。

「氷麗」

「あ、大翔様！」

「俺の側に居てくれよ？氷麗。必ず、お前を守るから」

「はい／＼／＼／＼」

リクオは水月の腰を抱き寄せたまま、妖怪達を連れて行こうとすると二代目が出てきてリクオに刀を渡した。

「リクオ……そいつの名は、”祢々切丸”と言つてな。俺が親父から受け継いだ刀だ。百鬼を率いるならそれを持っていきな」

「……すまねえ、親父」

俺達はリクオの百鬼夜行として、人間達を助けにトンネルへと向かった。

水月 s i e d

現場へと着くと、トンネルの入口が岩や土で埋められてる。私達ならばともかく、人間では暫く入ることは出来ないわね。

にしても…。

「…リクオ様」

「ん？」

「この辺り、他とは違って薄そうですわ」

私の指差す方を見てリクオ様は頷く。

「…青、黒」

「はっ」

小妖怪達が大体の岩を退かし、力がある青田坊や黒田坊達が残った岩と土の壁を破る。

「おほ…見つけましたぜ若ア、生きてるみたいですよー」

トンネル内に入ると、中には小学生が多数…。

それから、ガゴゼとその下僕の妖怪達がいた。

「…ガゴゼ」

貴様…なぜそこにいる？」

「本家の奴らめ…」

トツ、とリクオ様は地面に降り立つ。私に”降りて来い”と視線を送ってくるので、

その隣に降り立つ。

人の姿をしていない妖怪達が子供達をあやそうとするが…。

「オメエ等、顔怖エんだからやめろ」

「へ、へい」

リクオ様に止められる。

「よかった…無事で

カナちゃん、怖いから目つぶってな」

「…え、誰…?」

リクオ様はそれだけ言うと子供達に背を向けてガゴゼ達の方へと向き直る。

「子供を殺して大物ヅラかしら?」

「オレを抹殺し、三代目を我がモノにしようとしたんなら…

ガゴゼよ、テメエは本当に…小せえ妖怪だぜ」

リクオ様の言葉にガゴゼの下僕の妖怪が胸倉を掴みに掛かるが、首無の紐で止められる。

「若様や姫様には一歩も近付かせん。ガゴゼ会の死屍妖怪どもよ…」

「な、なめるなああああ…!」

反撃しようとするが首無の紐によってそれは叶わず…。

結果絞め殺された。

仲間達が戦っている間、リクオ様は私の髪を弄る。

「水月の髪、綺麗な色だな。触り心地も良い」

そう言つて髪にキスをする。

「わ、若様……／＼／＼／」

「ふっ、照れてるのかい？」

「……若様の意地悪……／＼」

袖で口許を隠し、リクオ様を見上げる。

「好きだぜ、水月」

優しく微笑むリクオ様に私も頬を緩める。

「私も好きですわ、若様」

腰を抱き寄せられ、私はリクオ様に擦り寄る。

それしても、力差で奴良組の方が圧倒的に有利。

ガゴゼ会の妖怪達はどんどんやられていく。

珍しく大翔も戦っている事に驚いたけれど、水麗が恋する乙女のような顔で大翔を見

つめてるから微笑ましいわね。

私達の勝利は目に見えた。

「くそっ……行けお前ら!!纏めてかかれ!!」

残りの妖怪達が一斉にかかってくる。

身の程知らずもしい所ね。

「水月、お前の力。オレに見せてくれ」

「若様…。分かりましたわ、見ていて下さいな」

リクオ様の側から名残惜しく離れ、一歩前に出る。

そして、腰に差した刀の柄を握る。

「！姫様!!」

「ふふ、私の大切な人達を傷付けしないで下さる?」

素早く抜いて横に一振りするとガゴゼ会の妖怪達は真つ二つ、ドサドサと残りの連中は倒れていく。

「…凄い……」

「くっ……ん?」

ガゴゼは一瞬怯むが、子供達を視界に入れると一直線に向かって行く。

「…水月、此処で待つてろ」

「はい。若様、お気を付けて」

子供達に迫るガゴゼの間にリクオ様が素早く入り、刀を刺す。ガゴゼは切れた顔に痛い痛い泣く。

「なんで、なんで…貴様のようなガキに…ワシの、ワシのどこがダメなんだー!? 妖怪の誰よりも恐れられているいうのにー!!」

呆れた…。そんな事も分からないだなんて。

「子を貪り喰う妖怪…そらあ”恐ろしい”さ…だけどな…弱えもん殺して悦にひたつて
る

そんな妖怪がこの闇の世界で1番の”畏”になれる筈がねえ」

「!!」

「情けねえ…こんなばっかかオレの下僕の妖怪共は! だったら!! オレが三代目を継いでやらあ!!」

人に仇なす様な奴あ、オレが絶対許さねえ。

世の妖怪共に告げろ、オレが魑魅魍魎の主となる!!

全ての妖怪はオレの後ろで百鬼夜行の群れとなれ!

リクオ様はその言葉と共に、ガゴゼを斬った。

「すげえ…あんな小さいのに…」

「カッコイイ…」

「妖怪って…ほんとにいたんだ…あんな、凄いだ…」

”畏”の意味とは。

——闇世界の主とは、人々に畏敬の念さえも抱かせる

真の畏れをまとう者であると——

私はリクオ様に近寄り、頬に手を添える。リクオ様は私の手に自分の手を重ねる。

「若様、お疲れ様でした」

初めて妖怪へと覚醒なされたからなのか、リクオ様は少し疲れているように感じる。

「…水月」

”側”に居る”と目で伝えてくるリクオ様に優しく微笑み、頷く。

「はい、お休みになられて下さいませ

私は貴方様のお側に居りますわ

後はお任せ下さい」

「…ああ」

安堵したように答え、私に凭れ掛かるリクオ様は次第に人間の姿に戻っていく。

ワラワラと妖怪が集まってくる。

「人間に…」戻っている」…?」

「!?!」

「まさか、四分の一…血を継いでいるからって1日の、四分の一しか妖怪でいられない…

とか…?」

軽く深呼吸をして、キツと見据え…声を張り上げる。

「お前達！今すぐ引き上げます！付いて来なさい！！」

「！はっ、姫様！！」

反応してくれた事に安堵しつつ、皆で帰る。

「ご立派でしたよ」

「へ、変じゃなかったかしら…」

「大丈夫でしたよ、姫様」

もしもの為にと控えてくれてたささ美が励ましてくれる。

リクオ様を心配しつつも代わりに百鬼夜行を引き連れる。

リクオ様、私は貴方様のお役に立てていましたか…？